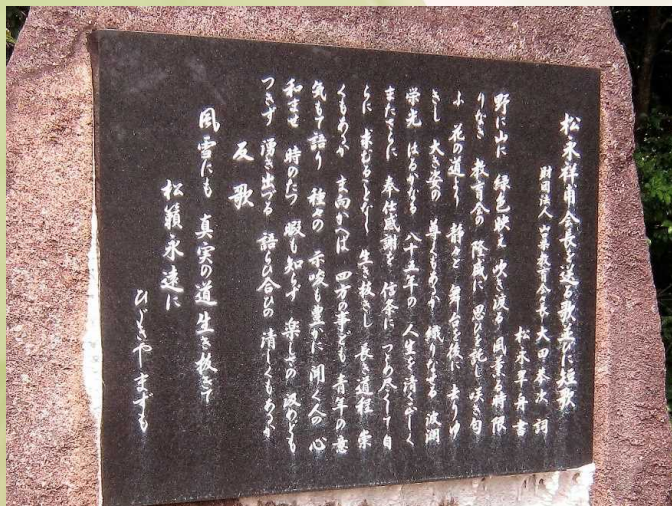


松永周甫開拓地



「松永周甫」は、江戸時代の終わりごろ、1816年、松永政道（まさみち）の長男として、萩で生まれました。15才のとき、父に連れられて江戸に行き、医者や農学者から教えを受けました。22才のとき、長崎に行き、医学を学びましたが、よく年には、萩の医者馬屋原大庵（まやはらたいあん）の塾に入り、その後、大阪の吉益掃部（よしますかもん）の塾にも入って勉強しています。25才のとき、大阪からもどり、名田島に家建て、畑で薬草を作りながら医者としての生活を始めました。しかし、周甫は、まだまだ研究を続けたいという気持ちが強く、たびたび、九州、四国、近畿地方の各地を旅行し、薬草を集めて研究を行いました。やがて、周甫は、だれも手をつけなかった鑄銭司の「南原（みなんばら）」の砂原を畑にする計画を立てました。そのために、のべ1万2千2百人もの人夫が働き、すべての費用を出した周甫の家では、正月に子供に着せる着物もない有様でした。完成した畑には薬草を植え、その薬草によって、多くの病人を治すこともできました。

こうした周甫の研究と努力が認められ、1859年には、長崎に来たオランダ人「シーボルト」に、薬草の標本を送るまでになりました。シーボルトは標本のお礼に医者用のメスをおくり、その研究をほめたたえました。

1866年には、藩も周甫の功績をみとめ、一代限りの藩医として、薬草の研究を続けるように命じました。時代が明治に変わっても、周甫は南原に住み続け、砂原をさらに開墾し、砂の被害を防ぐことに力をつくしました。1885年（明治18年）には、山口においてになった明治天皇から、産業功労者として報償されています。

周甫は、1886年（明治19年）、71才でなくなりましたが、その35年間に、周甫の努力によって開墾され、緑に変わった土地は、田が約2ha、畑が約1ha、造林が約10haなど、合計約32haにもおよび、さらに下流の住民の洪水への不安を取り除きました。